

# 黄表紙『頼朝七騎落』（安永六年刊）について

有 働 裕

A study of Yoritomo Shichikochi  
(Kibyoshi, published in Anei 6)

Udou Yutaka

本稿は、東京都立中央図書館加賀文庫蔵の『頼朝七騎落』<sup>よりしちきおち</sup>についてその書誌的記録を述べ、写真版および翻字を示し、注釈と解説を付したものである。なお、写真版は国文学研究資料館の新日本古典籍総合データベース上に公開されたものを使用した。また、翻刻にあたっては、大東急記念文庫本を参照した。閲覧および掲載をご許可いただいた都立中央図書館加賀文庫および大東急記念文庫本の皆様に深謝申し上げる。

## 一、書誌的記録

本書は、『補訂版 国書総目録』に、  
頼朝七騎落 <sup>よりしちきおち</sup> 三卷 ④詭源氏後日卷 ⑤黄表

また、棚橋正博氏の『黄表紙総覧 前篇』（青裳堂・昭和六一年）には以下のように記載されている。

紙 ⑥柳川桂子作、鳥居清経画 ⑦安永六刊 ⑧東北  
大狩野（鶴屋版黒本集三〇）・日比谷加賀・大東急  
と記されているもののうちの加賀文庫本であり、『東京都立日比  
谷図書館蔵 加賀文庫目録 補訂版』（昭和五五年発行）の「小  
説・物語（黄表紙）」の項には、次のように記されている。

10064 詭源氏／後日卷 頼朝七騎落 函 8-12

柳川桂子著 鳥居清経画

江戸 鶴屋喜右衛門 安永6

3冊合1 小

## ○誂源氏／後日巻 頼朝七騎落

三巻・三冊・十五丁 柳川桂子作 鳥居清経画 鶴屋版

○序文、跋文ナシ・桂子作（十五ウ）・鳥居清経画（十五

ウ） 柱題「七きおち」（一～十五）

『備考』前書（伊藤館／北条館 優美源氏鎧雛形、有勸注）

の後編。子を失ったことで発心した与惣太は、石橋山合戦で敗走する頼朝一行を助けかくまい、やがて捕らわれの身となつて拷問死する。一方、救われた頼朝は加勢を得て捲土重来を果たし、第一の働きをした真田与市は誰袖を娶り、めでたく世に栄える。

加賀文庫本の体裁は以下の通りである。

(1) 表紙 後のもの。無地。水色。一七・五cm×一二・八cm。後の

書題簽（一四・三cm×三・一cm）が貼付されている。

(2) 題簽 上巻の原題簽（一三・三cm×九・六cm）が表紙見返しに、下巻の原題簽（一三・五cm×九・六cm）が裏表紙見返しに貼付されている。

(3) 匡郭 十五・六cm×十一・五cm。

(4) 板心 「七きおち上 壹（〽五）」

「七きおち中 六（〽十）」

「七きおち下 十一（〽十四）」

「七きおち下終 十五」

(5) 紙数・冊数 各五丁、計十五丁。三冊合一。

(6) 画作者 十五丁裏に「桂子作 鳥居清経画」とある。

(7) 刊年 『花粧対兄弟』（柳川桂子作、鳥居清経画、鶴屋版）の一丁表の広告「西のとし新板もろく」に記載があることから安永六年と推定される。

(8) 彩色 全丁にわたり、朱・青・緑・黄・茶色などの彩色が施されている。

また、大東急記念文庫本は加賀文庫本と同版本であり、『大東急記念文庫書目』（昭和三十年発行）には以下のように記されている。

誂源氏／後日巻 頼朝七騎落 三巻 柳川桂子作

鳥居清経画 安永六刊（鶴屋）（冊）一（函）四四

（架）三一（番號）四三二七

大東急記念文庫本の体裁は以下の通りである。

(1) 表紙 原のもの。無地。黄色。一七・三cm×一二・九cm。

(2) 題簽 下巻の原題簽（一三・六五cm×一〇・〇cm）が表紙に貼付されている。

(3) 匡郭 十五・六cm×十一・六cm。

(4) 板心 加賀文庫本と同。

(5) 紙数・冊数 各五丁、計十五丁。三冊合一。

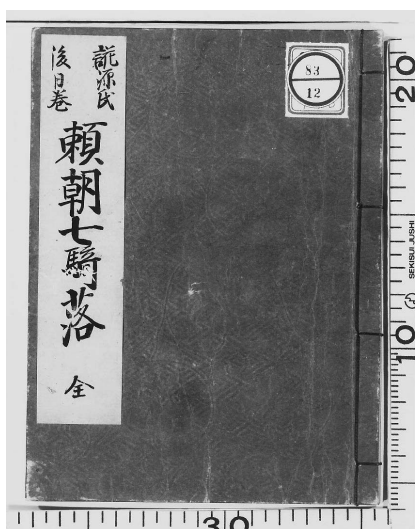
(6) 彩色 なし。ただし、下巻の題簽のみ緑・黄の彩色が施されている。

なお、狩野文庫本については未見である。

## 二、影印、翻字および注釈

翻字にあたっては、原本で平仮名表記となっている部分に適宜漢字をあて、原本の表記を振り仮名で示した。また、適宜句読点や鉤括弧を補った。明らかに脱字と思われるものについては（ ）で補った。

なお、注釈での『平家物語』の本文は梶原正昭・山下宏明校注の新日本古典文学大系（岩波書店）に、『源平盛衰記』は市古貞次・大曾根章介ほか校注の「中世の文学」（三弥井書店）、『曾我物語』は新編日本古典文学全集（小学館）によった。





(題簽)

しん 謚源氏  
やとげんじ

酉 頼朝七騎落 上  
よりともしちきおち

はん 後日巻  
ごにちのまき

(二丁表)

治承の頃かとはよ、伊豆の国のかたほとりに、与惣太といふ農人あり。しかるにこの者、妻早く別れ、一人の幼子をやもめの身に育てし。又猿を愛して、つね／＼手飼いの猿ありけり。

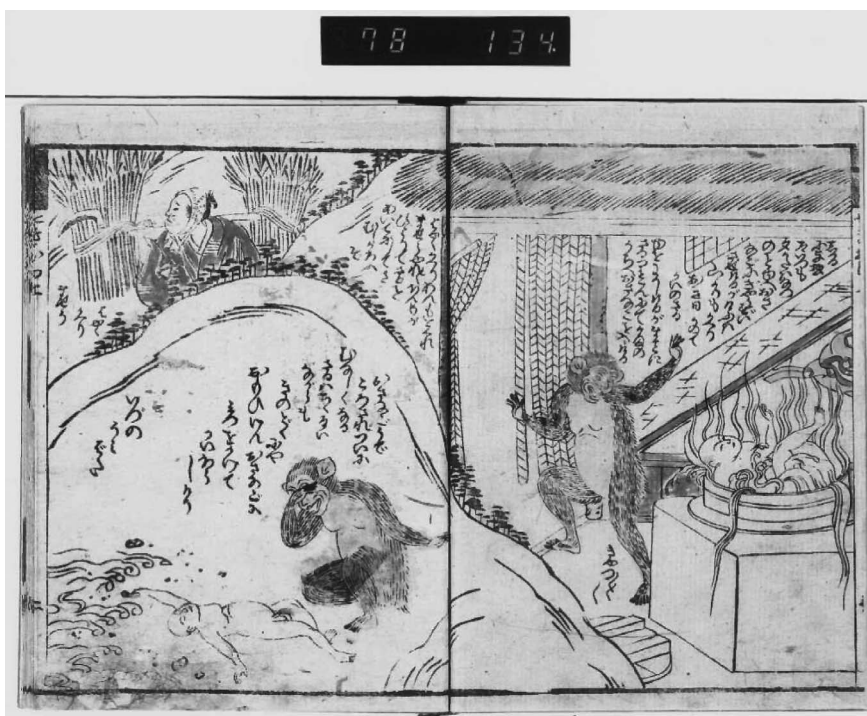
「おれは山へゆくぞ。随分いつものやうに留守をしるよ。」

「きやつ／＼。」

「と、さん、おれも留守をしようから、あんもを買つて来てくん  
なよ。」

○治承一一七五―一一八一。源頼朝が挙兵して山本兼隆を討つたものの、石橋山の合戦で平家方の大庭景親に敗れるのは治承四年八月二十三日。富士川の合戦は同年十月二十日。

○あんも―小児語で餅のこと。「下総はおかべ武蔵はあんもなり」  
『誹風柳多留』十二篇〕は両国橋の下総側にある日野屋の淡雪豆腐と武蔵側にある幾世餅の二つの名物を並べた句。



## (二丁裏・二丁表)

しかるに与惣太、いつも夕方<sup>かた</sup>は、夏<sup>なつ</sup>のことゆへ、幼子<sup>おきな</sup>に行水<sup>ぎょうすい</sup>させけるが、今日<sup>けふ</sup>は山よりも帰りお<sup>かへ</sup>(そ)き日<sup>ひ</sup>、かの手飼<sup>てか</sup>いの猿<sup>さる</sup>、湯<sup>ゆ</sup>を沸<sup>わ</sup>かしけるが、まことに猿利根<sup>さるりこん</sup>にて、釜<sup>かま</sup>の内<sup>うち</sup>へ幼子<sup>おきな</sup>を入<sup>い</sup>れる。

「早く<sup>はや</sup>帰りあんもをくれませう。やれ<sup>へ</sup>、坊<sup>ぼん</sup>めが一人<sup>ひとり</sup>で猿<sup>さる</sup>を相手<sup>あいて</sup>にして、さむし<sup>は</sup>かるふぞ。早く<sup>はや</sup>帰りませう。」

「きやつ~~~~。」

幼子<sup>おきな</sup>茹<sup>じう</sup>で殺<sup>ころ</sup>され、ついに虚<sup>むな</sup>しくなる。猿<sup>さる</sup>は畜類<sup>ちくるい</sup>ながらも、きのどくにや思<sup>おも</sup>ひけん、幼子<sup>おきな</sup>に水<sup>みづ</sup>をかけて介抱<sup>かいほう</sup>しけり。

伊豆<sup>いづ</sup>の海端<sup>うみはた</sup>。

○猿利根—猿智恵。猿利口ともいう。

※この場面は井原西鶴の『懷硯』(貞享四年刊)巻四の四「人真似は猿の行水」を利用したと思われる。『懷硯』改題本には、版木を改編した『匹身物語』(宝永二年以前)、それを更に改編した『筆の初染』(宝永二年刊)があるが、『筆の初染』では「人真似は猿の行水」は削除されている。『懷硯』のこの場面の利用は八文字屋本『愛護初冠女筆始』巻三(江島其積・享保二十刊)に見られ、また、草双紙における利用例が、奥村利信画『狼に衣』(黒本・青本・奥村版・刊年不明。『岩崎文庫貴重本叢刊 近世編 第六巻 草双紙』所収)に見られる。



(二丁裏・三丁表)

与惣太は我家へ帰り見るに、誰も見へず。家の前なる海端に猿身を投げてあり。幼子も虚しくなりてありしゆへ、驚きなげく。

「悲しや〜。」

近所の百姓ども、みな〜驚く。

「これはとうしたものだ。」

「やれ〜、かはゆいことだ。」

「やれ〜、あんたることだ。」

※『懷硯』巻四の四「人真似は猿の行水」の該当部分は左記の通り（『新編西鶴全集 第三巻』勉誠出版・平成二〇〇三年による）。

此猿留守の中に湯をわかし湯玉のたつを見て、盥に丁ど一はいとり、何の加減見るまでもなく、此子を丸裸になし、内義の取さばきよくみおぼえし通に、湯の中へ入る、と喚といふ聲ばかりに息絶ぬ。これにおどろき、夫婦はしり戻り取りあげてみれば、はや茹海老のごとく皮もつゝかず、二目とも見ず（中略）猿涙ながして手を合せるもまたむごくおぼへて、まづは野辺のけふりとなしぬ。其後此猿七日〜に墓所へ参り、折〜の草花山に入て櫛手折てこゝにさし、一日に三たびづゝまふで、涙をながし、百日にあたる朝水こゝろしづかに手向、竹の鉾にてみづから咽ぶえ突とをして果ぬ。



## (三丁裏・四丁表)

与惣太は悲しさやるかたなく、ついに幼子を寺へ葬り、その身も発心する。

## 春興、春眠不覚曉處々

与惣太はこれより東国地藏院と申寺の留守居になりけり。

「これも前生の約束じや。」

「有難ふ存じます。せがれが跡を問いませう。」

「棄恩入無為真実心、南無阿弥陀仏。」

○春興―「春興」と題された漢詩には、唐の詩人武元衡のものがあつた。ただし、衝立に記されているのは「春眠曉を覚えず」すなわち孟浩然の「春曉」である。題名が類似しているために作者が間違えたものと思われる。

○地藏院―石橋山の合戦で敗れた頼朝が身を隠したとされる「小道ノ地藏堂ト云寺」(『源平盛衰記』)になぞらえた寺名であろう。

○棄恩入無為真実心―『法苑珠林』二十二等に見える、出家得度の儀式において戒師が授ける言葉。親子夫婦の恩愛の念を捨て無為の道に入ることを説く。『平家物語』巻十「維盛出家」にも、「さてもあるべきならねは、」流転三界中、恩愛不能断 棄恩入無為、真実報恩者」と三回唱へ給ひて、遂にそりおろし給ひてンげり」とある。



(四丁裏・五丁表)

これはさておき、こゝにそのころ岡崎の四郎義実<sup>よしざね</sup>は、孫<sup>まご</sup>の真田<sup>まんだ</sup>の与一<sup>いっく</sup>が戦<sup>いくさ</sup>にたち、打死<sup>うちじ</sup>にとほのかに聞<sup>き</sup>つたへ、心<sup>こころ</sup>を痛<sup>いた</sup>むる。その折<sup>おり</sup>から真田<sup>まんだ</sup>が傳文蔵<sup>めんと</sup>くにやす、与一<sup>よひち</sup>が鎧<sup>よろひ</sup>を持ち来<sup>きた</sup>り、様子<sup>ようす</sup>を物<sup>もの</sup>語<sup>がた</sup>る。

「さてもおと、いの戦<sup>いくさ</sup>に真田<sup>まんだ</sup>様討死<sup>うちじ</sup>と申せ共、宵闇<sup>よいぐみ</sup>のことゆへ、未<sup>いま</sup>た実説<sup>じつせつ</sup>は知<sup>し</sup>れかねまする。」

与一<sup>いっく</sup>に許嫁<sup>いひうけ</sup>の誰<sup>た</sup>か袖<sup>そで</sup>といふ娘<sup>むすめ</sup>、こゝへ来<sup>き</sup>たり。与一<sup>いっく</sup>が最期<sup>さいご</sup>と聞<sup>き</sup>、悲<sup>かな</sup>しむ。

岡崎四郎義実<sup>おきよしざね</sup>。

「なに／＼与一<sup>いっく</sup>が討死<sup>うちじ</sup>、未<sup>いま</sup>た実説<sup>じつせつ</sup>は知<sup>し</sup>れぬとな。」

岡崎四郎の奥方<sup>おくかた</sup>、かたおかの前<sup>まへ</sup>。

○岡崎義実——三浦義継の四男。頼朝に挙兵のときから従った。岡崎は相模国大住郡の地名で現在の神奈川県平塚市内。

○真田与一——岡崎義実の嫡男。大住郡真田（神奈川県平塚市真田）を所領とし、佐奈多与一を称した。頼朝の忠臣として逸話が多く、能・狂言・歌舞伎の題材になっている。

○傳——貴人の子の養育係。養い親。

○文蔵くにやす——佐奈多文三家安のことだが、徳川家康をはばかり「くにやす」としたか。『源平盛衰記』巻二十には、義忠が二歳の頃から二五歳に至るまで親代わりとなって育てたとある。



## (五丁裏・六丁表)

誰か袖姫は与一が討死と聞、夫の敵を射たんと、館を忍び出る。

誰か袖が書置を見て驚く。

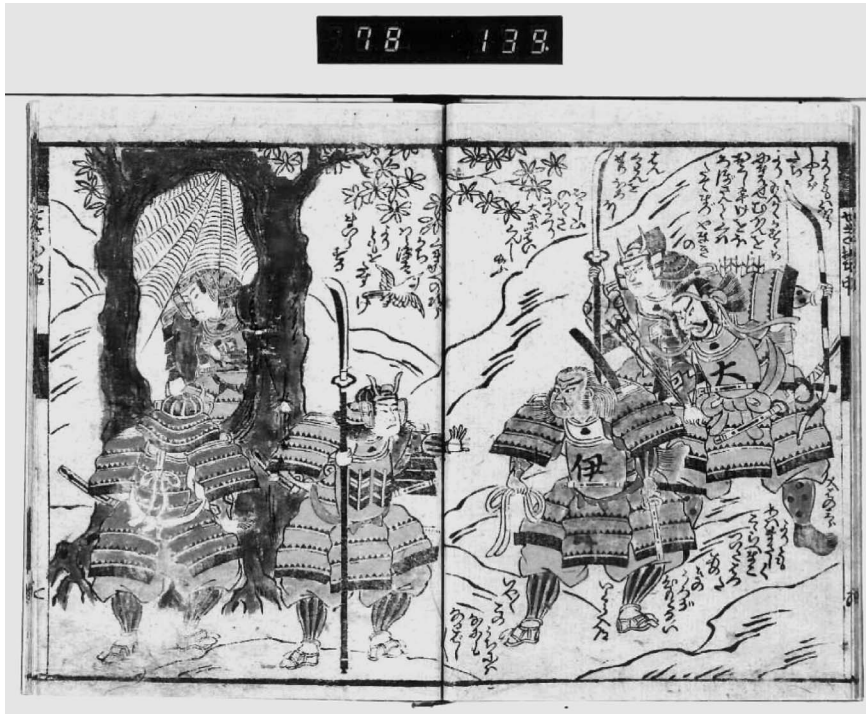
誰か袖姫は、与一が討死と聞、何とぞ敵は平家方とはかり聞、かなたこなたと迷ひしところ、図らずも与一に対面し、嬉しかる。

「嬉しうござんすそへ、与一さん。」

「それかしにいつはり、山木の判官、間違ひにて討たれしゆへ、かへつてそれかし命助かり、海野、家は本名ゆへ、いまは海野、六郎といふぞや。」

○山木の判官―平兼隆。桓武平氏、平信兼の子。伊豆国の目代として田方郡山木郷（静岡県田方郡韮山町韮山山木）に住み、山木判官と称した。父信兼の訴えにより山木に配流されていたが、平清盛の世になってその権勢を借りて威を振るうようになった『吾妻鏡』という。頼朝の伊豆での最初の挙兵により攻め滅ぼされる。本書の前編にあたる『優美源氏鑑雛形』には、山木判官かげたかとして登場し、真田与一の鎧を盗み取って身に着けていたところを与一に討たれる、という経緯が記されている。

○海野六郎―真田氏を信濃国の海野氏（小県郡海野荘）の支族とする説によるか。



（六丁裏・七丁表）

頼朝は北条が館より、文覚かす、めにまかせ、謀反を起こし、平家を滅ぼさんと企て、まづ山木の判官を攻め滅ぼし、石橋山の戦に移り、大に敗軍し給ふ。

大庭の三郎。

「頼朝めは、まさしくこゝらへまこついたはつた。あの木のうろが心もとない。」

伊東入道。

熊谷の次郎、梶原源太、頼朝を助けまいらする。

「いや、この内には何もなかばし。」

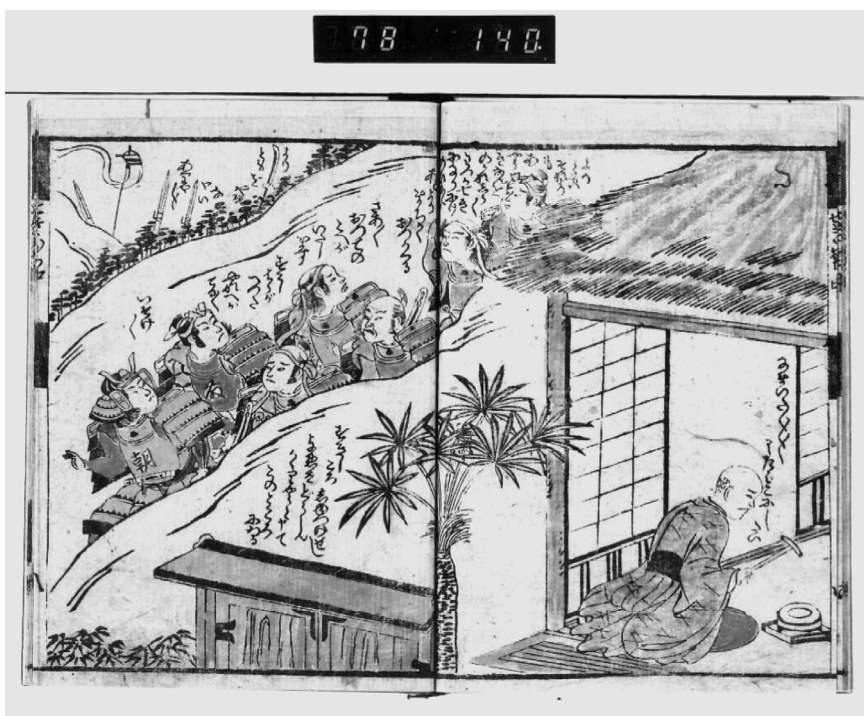
○文覚—遠藤氏。俗名盛遠。「ことしいかなる心にて謀反をばおこされけるぞといふに、高雄の文覚上人の申す、められたりけるとかや。」（『平家物語』巻五「文学荒行」）

○大庭の三郎—大庭三郎景親。俣野五郎景久の兄。元来源氏の家人であったが、平治の乱後は平氏に仕え、石橋山の合戦では源氏方を破るが頼朝を取り逃がし、その後再起した頼朝のもとに降参して斬首された。

○伊東入道—河津次郎祐親。曾我兄弟の祖父。伊東は現在の静岡県伊東市、中世の伊東荘をその名の起源とする。

○梶原源太—梶原景時の嫡男景季、通称源太。この臥木隠れの頼朝を助ける逸話は、『源平盛衰記』巻二十一など一般には父親である景時のものとされている。

○なかばし—童謡「京橋中橋おまんが紅粉」による地口か。



(七丁裏・八丁表)

頼朝よりともはそれよりも危あやうき難なんを逃のがれ、主従しゅじゆわつか七騎しちきになり、逃にげのひ給ふ。

あとより間近まぢかく追おつかくる。

「さあ、追手おつての声がいたします。」

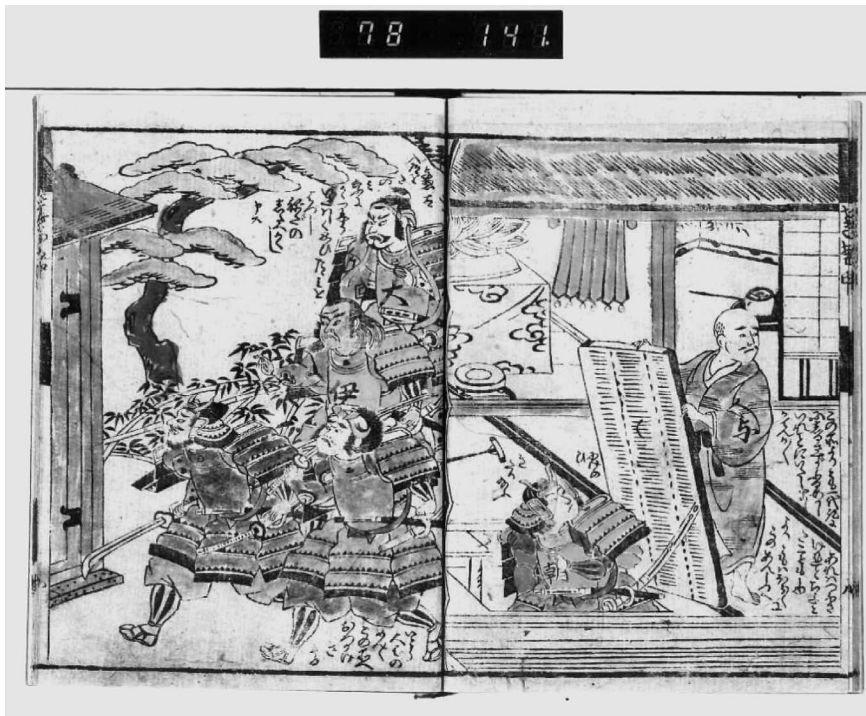
「少し腹はらが減へつた。やれへがてる、急いそけ。」

「頼朝よりともをやるなやい、ありや。」

過すきしころ出家しゆつけせし与物太道心どうしん、かくりやうと申て、このところにある。

「南無阿弥陀なまいた~~~~、ア、たばこにしたい。」

○かくりやう―『源平盛衰記』巻二十一「小道地藏堂事」に記されている逸話による人物設定と思われるが、「上人法師一人アリ」とあるだけで、上人の名前は記されていない。その文章を引く『新編相模国風土記稿』第貳輯・卷三十二「足柄下郡卷十一」の「地藏堂」には「此頃ノ住僧ヲ純海ト云」とある(昭和四十七年刊の名著出版本による)。黒本『頼朝一代記』(延享元年・画作者不明)も同様の逸話を用いるが、そこでは「ずいよ上人」と記されている。



(八丁裏・九丁表)

この所『頼朝一代記』にあれば、つふさに記さず。ふるめかし  
 けれど、ちよと入れ事にいたしました。子供衆、がてんか〜。

頼朝はほう〜にこの庵室へ逃げ延び来たり給ふ。

与惣太入道をたのみ給ふに、かくりやういたはしく思ひ、畳を  
 はづし、根太の下へ隠し申す。

伊東、大庭のめん〜、この所へ追つかけきたる。

○この所『頼朝一代記』にあれば―『頼朝一代記』は画作者不明  
 の黒本で、全十二巻六十丁。延享元年（一七四四）鱗形屋版。  
 『叢』十六号（二九九四）・十七号（二九九五）に黒石陽子氏によ  
 る翻刻と解説が掲載されている。同書の二十五裏・二十六表に  
 は、「杉山のうろにてふしぎのいのちたすかり給ひ 小みちのぢ  
 ぞうとうのへんまでをちのび給ふ 又てきのおつかくるゆへ此所  
 へかくれ給ふ」「小道のぢぞうどうのあんしゆずいよ上人 より  
 朝を板しきの下へかくし さあらぬていし給ふ」とある。

○畳をはづし、根太の下へ隠し申す―『源平盛衰記』巻二十一に  
 は「此堂八里遠シテ山深ケレバ、身ノ用心ノ為ニ仏壇ノ下ニ穴  
 ヲ構テ、人七八人入ヌベキ程ニ用意セリ」とある。



## (九丁裏・十丁表)

それより伊東入道、大庭の三郎、滝口をはじめとして、おい／＼に間近く攻め寄せ、頼朝のおゆくゑを攻めけれども、白状せぬゆへ、ついに厳しく攻めて殺しける。

「ほんさま、よし町の遊びより悪かんべいの。」

「さあ白状しろ。へんとうは菜飯に田楽だ。」

「さあ、頼朝を出せ。」

「しふとい坊主めた。」

○滝口―山内首藤三郎経俊。山内は相模国鎌倉郡山内荘(神奈川県鎌倉市内)。頼朝挙兵の際には大庭景親の軍に加わり、頼朝を目がけて矢を放った。その後捕えられたが、頼朝の乳母であった摩々局の嘆願によって助命され、頼朝に仕えた。『曾我物語』に「相模国の住人山内滝口三郎」とある。

○ついに厳しく攻めて殺しける。―『源平盛衰記』には「栲木ニカケテ巳午ノ時ヨリ申ノ時バカリマデ上ツ下ツ推問スレバ、絶入ヌル事度々也。」「申ノ時ニハ上人終ニ攻殺サル。」とある。黒本『頼朝一代記』の二十六裏・二十七表には、「大ばがせいをつかけ来りずいよをいろ／＼にせめてより朝のゆくゑをとふ」「ずいよ上人ついにせめころされ給ふ」とある。

○よし町―芳町。堀江六軒町の通称。陰間茶屋で栄えた。宝暦・明和頃が最盛期であったという。



(十丁裏・十一丁表)

与惣太道心とうしんに情なさけに頼朝危よりともあやうきをのかれ給ひ、その後のちみなく帰かへりてのあとにて、与惣太道心とうしんが死骸しかいを見みて頼朝よりともなけきしつみ給ふ。この跡あとを頼朝寺らいでうしと申て、今いまに古跡こせきに残りある也。熱海あたみへ湯治とうしにゆく道みちなり、合点かてんか。

その後頼朝公よりともこう、御舍弟範頼みせていのりより、義経公よしつねに対面たいめん、蒲原かんはらにて御たいめんあり。それよりことく平家けを滅ほろぼし給ふ。

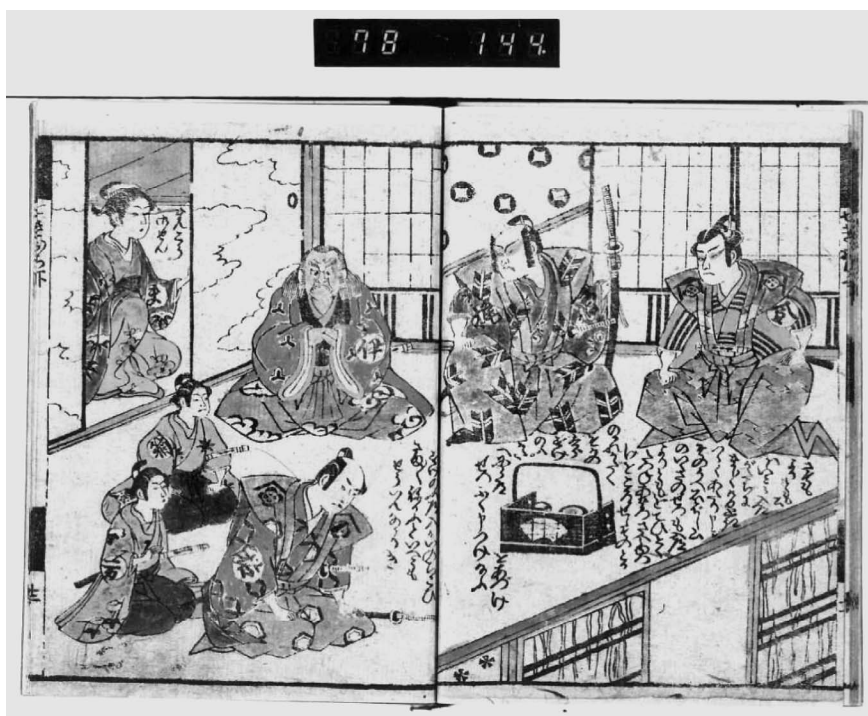
伊東入道いとうにりだうついにいましめらるゝ。

「エ、残念さんねんな。」

藤九郎盛長もりなが。

○頼朝寺——『新編相模国風土記稿』第貳輯・卷三十二「足柄下郡卷十一」の「地藏堂」には以下のように記されている。「頼朝深ク是ヲ徳トシ。志ヲ得ルノ後。縁海田五千頃ヲ寄附シ且堂宇ヲ新造シテ。小道山頼朝寺ト号セシトナリ。事ハ境内ニ立ル。明和二年ノ碑ニ詳ナリ。〔中略〕此堂宇当時ハ山中ニアリシヲ。〔旧跡今詳ナラス。〕中古今ノ地。村南海涯ニ移スト云。英潮院持。」この明和二年造立の碑は、湯河原町吉浜字柏坂一の英潮院地藏堂前に現存する。

○藤九郎盛長——安達藤九郎盛長。源頼朝が流人であつたところからの側近。開幕後も頼朝の重臣となる。『曾我物語』では頼朝と北条政子の間を取り持ったとされている。



## (十一丁裏・十二丁表)

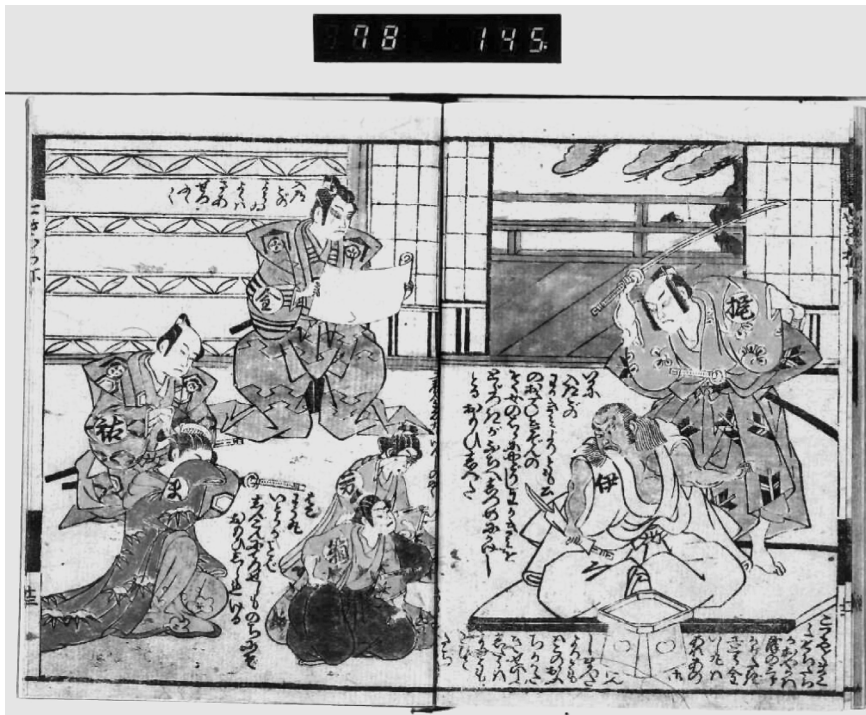
さても頼朝公は、伊東入道が館にまし／＼けるととき、つらくあたり申し、その上石橋山の戦の節も、入道頼朝を手ひどく尋ね、あまつさへ出家を殺せしその科のかれかたく、曾我の太郎祐信方へ入道をあづけ、切腹申つけ給ふ。

祐信、道入か命乞ひさま／＼願ふといへとも、承引なかりき。  
満江御前。

○伊東入道が館にまし／＼けるととき、つらくあたり申し―本書の前編にあたる『優美源氏鑑雛形』では、娘の辰姫と頼朝との間に生まれた若君を殺害するよう入道が命じている。

○曾我の太郎祐信―相模国足下郡曾我（神奈川県小田原市下曾我）を領した武士。伊東入道（河津次郎祐親）の姉の子、すなわち甥。伊東入道の子河津祐通の妻は、夫の死後二人の子供（二万・箱王）を連れて曾我祐信と再婚する。『曾我物語』「相模国の住人曾我太郎祐信と申すは、入道がためには姉の子なれば、甥なり。」

○満江御前（万劫御前）―『曾我物語』では、伊東祐親の娘で、工藤祐経に嫁いたが、父の手で取り返されて、土肥遠平の妻になったとされている。歌舞伎では、『嫁入伊豆日記』（享保九年・市村座）以降、曾我兄弟の母の名ともされている。



(十二丁裏・十三丁表)

「いかに入道どの、我が君頼朝公のお種、貴殿の息女のはらに宿りし若君を、とゞろきが淵へ沈めかけし科、思ひ知つた。」

工藤金石丸、検視の役。

「入道どの、用意よくは、さあ切腹く。」

「こりやく孫子、そちたちか親河津の三郎か敵、工藤金石丸はあれあの御見使、又頼朝はこの翁父か敵。成人したらは頼朝を、一太刀恨みてくれいヤイ。」

箱王丸、伊東がことば、心魂に徹せしも、後にぞ思ひ知られける。

○とゞろきが淵―『曾我物語』「伊東莊松川の奥、岩倉の滝山の蜘蛛が淵に石を付けて沈めよ」また、古活字本『曾我物語』（日本古典文学大系）には「と、きの淵に柴づけにしたてまつりけり」とある。

○工藤金石丸―工藤左衛門尉祐経。曾我兄弟の親の敵。『金石』は祐経の幼名。『曾我物語』巻一「然るに、何ぞ、伊豆国の住人伊東次郎祐親が孫、曾我重郎祐成・同じく五郎時宗兄弟二人ばかりこそ、將軍家の陣内をも憚らず、親の敵を討て、芸を当庭に施し、名を後代に留めける。その敵人は、すなはち一家の輩、工藤左衛門尉祐経なり。いかにと尋ねれば、先年、所帯を争ひし故により、親昵を誅せしその報ひとぞ聞えける。」



(十三丁裏・十四丁表)

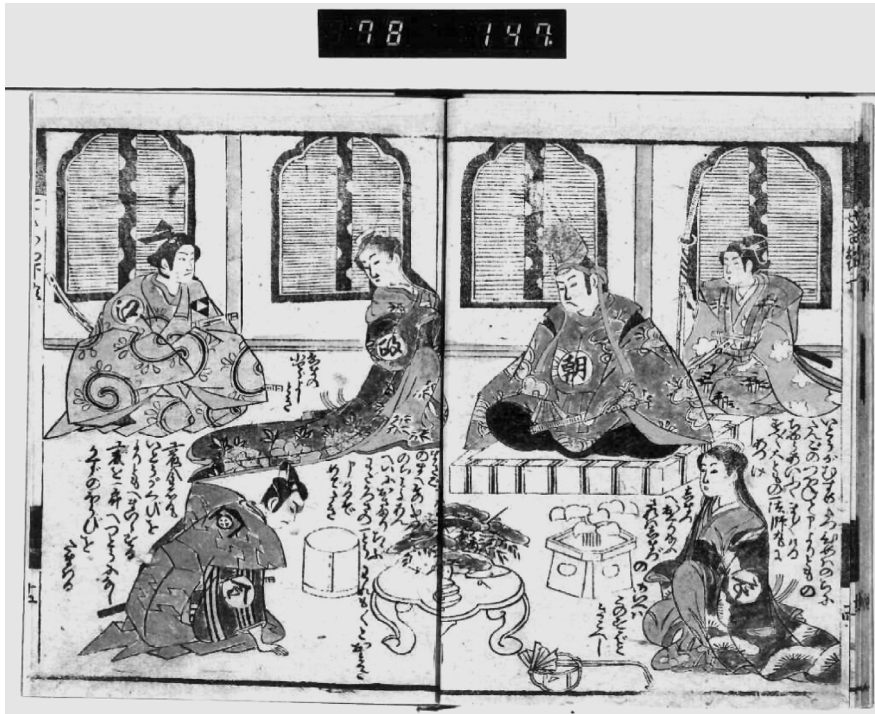
「さあ工藤どの、立ちあがつて勝負く。」

祐信<sup>すけのぶ</sup>二人の子供<sup>こども</sup>を制<sup>せい</sup>する。

検視<sup>けんし</sup>の役人<sup>やくにん</sup>、工藤金石丸祐経<sup>すけつね</sup>。又、介錯<sup>かいさく</sup>人は梶原源太<sup>かぢはら</sup>、伊東入道<sup>いとう</sup>が首<sup>くび</sup>うち、頼朝<sup>らいちょう</sup>の御殿<sup>ごてん</sup>へ帰<sup>かへ</sup>る。

「何<sup>なに</sup>、一万<sup>いちまん</sup>・箱王<sup>はさわう</sup>、河津<sup>かわつ</sup>の三郎<sup>さぶろう</sup>か敵<sup>かたみ</sup>それがしを討<sup>う</sup>たとな。こさかしい、末<sup>すえ</sup>たのもししい小人<sup>こじん</sup>じやな。」

○伊東入道が首うち―『曾我物語』巻三「そもそも、左殿<sup>すけどの</sup>に不忠<sup>ふちゆう</sup>なりし伊東次郎祐親<sup>いとうのじろうすけかた</sup>入道<sup>にゅうだう</sup>をば三浦介義澄<sup>みうらのすけよしすみ</sup>をもつて召<sup>め</sup>されければ、「前日<sup>ぜんにち</sup>の罪科<sup>ざいこ</sup>、遅<sup>おそ</sup>れがたし。その上、参<sup>まゐ</sup>りたらば、さだめて首を召<sup>め</sup>されんずらん。この由<sup>よし</sup>を申し給へ」とて、腹掻<sup>はら</sup>き切<sup>き</sup>つてぞ失<sup>うし</sup>せにける」。また、古活字本『曾我物語』(日本古典文学大系)には、「さて、不忠<sup>ふちゆう</sup>をふるまひし伊東入道<sup>いとうのにゅうだう</sup>は、いけどられて、鐙<sup>でう</sup>の三浦介義澄<sup>みうらのすけよしすみ</sup>にあづけられけるを、前日<sup>ぜんにち</sup>の罪科<sup>ざいこ</sup>のがれがたくして、めしいだし、よろいするといふ所にて、首をはねられける。」とある。『吾妻鏡』によれば、平家に合流しようと鯉名の港(南伊豆町手石小稲付近)に船を浮べていたところを天野遠景に捕えられ、黄瀬川の頼朝のもとに連行されて、三浦義澄に預けられた(治承四年一〇月一九日)。その後義澄は、政子の懷妊を機会に頼朝に助命を願い出て許されるが、そのことを祐親に伝えると自殺したとする(寿永元年二月一四日)。



(十四丁裏・十五丁表)

伊東が娘辰姫は、後に丹後の局と申。頼朝の寵愛ふ(か)くまし〜ける。すへ〜大友の一法師丸にあつけ、島津へおくり給ふ。されば、島津の御家は、このすばと聞こへし。

政子の前その後御代安平におさまり、秩父和田上総の一党、われも〜とお味方申けるぞめでたき。

ゑまの小四郎よしとき。

工藤金石丸、伊東が首を頼朝へまいらす。工藤を一郎別当になし、数の褒美をたまはる。

○丹後の局―島津家初代の島津忠久(？〜一二二七)は、『島津氏系図』によれば源頼朝の庶子であり、母は比企能員(の)妹丹後局であるという。また、丹後局は頼朝の妻政子の嫉妬を恐れて西国に逃げ、摂津住吉社の境内で夜間に狐火に守られながら出産し、近衛家の庇護を受けたなどの説話がある。〔国史大辞典〕による。

○一法師丸―大友能直(一二七二〜一二二三)。鎌倉時代前期の有力御家人。豊後の守護。一法師丸は幼名。出自については、源頼朝の庶子という説がある。

○一郎―一臈。郎は当て字。『曾我物語』に「二十一歳にて武者所の一郎を経つつ、工藤一郎祐経とぞ呼ばれける。」とある。多くの修行を積んだ僧を上臈ということから高位の者を指す語となり、武者所の筆頭人を一臈というようになった。



## (十五丁裏)

こ、に大庭の三郎海野の六郎に生け捕られ、地獄が谷にて討たれる。

「ア、いま〜しい。」

「軍勢にやつし、はかりことに落し、生け捕りました。」

真田与市、海野の六郎と名乗り、討ち死にせしとははかりことなり。

かくて誰が袖、大庭の三郎を高手小手にいましめ、夫真田に対面し、喜ぶ。

「てがらく、つきせぬ妹背の縁、めでたい〜。」

鳥居清経画

桂子作

## (題簽)

しん 謹源氏

酉 頼朝七騎落 下

はん 後日巻

○地獄が谷―鎌倉の建長寺の寺域内（回春院付近の谷）には、創建以前に地獄谷と呼ばれていた地域があり、刑場であったという。

## 三、解説

本書は、源頼朝の石橋山の合戦からの敗走と臥木隠れ、源氏方が勝利した後の伊東入道（河津次郎祐親）の切腹、曾我兄弟と工藤祐経との対面、真田与市の活躍などを主たる題材とするもので、同じく安永六年刊の黄表紙『伊藤館／北条館 優美源氏鑑雛形』の後編として書かれている。

『優美源氏鑑雛形』は鶴屋喜右衛門版で、画作者については十五丁裏に「桂子作」と記されるのみである。ただし、本書の前編であることやその画風から見て、鳥居清経画としてよいであろう。以下にその梗概を述べる。

平治の乱の後、伊豆に流された源頼朝は、伊東入道の娘辰姫と恋仲となり、一子をもうける。そのことを知った伊東入道は、息子祐清の諫言を聞き入れず、その子を殺すように新参の家来（実は安達藤九郎盛長）に命じる。盛長は我が子身を替りにして淵へ沈め、祐清もそれを知りつつ見逃す。また、頼朝と辰姫は盛長夫婦の手引きで北条時政の館へ逃げ、匿われる。頼朝は時政の娘政子と恋仲になり辰姫は悲嘆する。その様子を見ていた文覚上人は頼朝の好色を戒め、帝の院宣と源義朝公のしゃれこうべを示し、平家追討を誓わせる。一方、政子を恋慕していた山木判官は時政に婚礼を申し

入れ受諾されるが、祝言の夜の床にいたのは文覚であり、打擲されて逃げ出す。山木判官は山中で長尾新六を襲い、真田与市に進上される鎧を奪う。その後頼朝らが拳兵し、伊東入道は生け捕られ、山木判官は真田与市に討ち取られる。

この前後二編の黄表紙の内容は、『源平盛衰記』や『曾我物語』の系譜に連なるものである。注釈にも記したように西鶴の『懷硯』や黒本の『頼朝一代記』も典拠として用いているが、演劇の影響をより強く受けていることは一読すれば明らかである。

ただし、具体的にどのような演目を意識して書かれたのかは、今のところ明らかにしない。『歌舞伎年表』によれば、本書の刊年に近いところで登場人物に共通性が高いものとして、明和四年（一七六七）十一月の江戸森田座の『眞田與市磐土産』、明和七年十一月江戸市村座の『女夫菊伊豆着綿』、安永三年（一七七四）十一月の江戸中村座『顔鏡天岩戸』が確認できる。この点については後考を俟ちたい。